シノドスへの歩み　みことばと共に
年間第四主日Ａ年

小西広志

2023 年 1 月 29 日

朗読箇所

第一朗読　ゼファニヤ書　2 章 3 節、3 章 12 － 13 節
第二朗読　コリントの信徒への手紙 1　1 章 26 － 31 節
福音朗読　ヨハネによる福音書　5 章 1-12a 節

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は 2023 年 1 月 29 日、年間第四主日です。主日のミサの三つの朗読をあじわってみましょう。

山上の説教

『マタイによる福音書』の 5 章から 7 章にかけていわゆる「山上の説教」と呼ばれる箇所があります。5 章 1 節と 8 章 1 節にそれぞれ「山に登った」、「山を下りて」とありますから、場面が山の上であったことに由来します。しかし、『ルカによる福音書』の並行箇所（6 章 20-49 節）では平地あるいは山麓での説教となっています。

聖書では山は神がご自分を顕す（あらわす）場所で、神聖な場所でした。『マタイによる福音書』が場面を山の上にしたのは、イエスさまの説教が神の新しい自己開示（啓示）であるという理解があったからでしょう。イエスさまは説教をすることで神さまがどういった方であるかを伝えようとなさったのです。ところで、どうして「山上の説教」と呼ばれるようになったかというと、アウグスチヌスの著作『主の山上での説教』によります。『マタイによる福音書』のこの箇所と、並行する『ルカによる福音書』の箇所は「山上の説教」という呼び名が固定化していきました。

苦しみに耐えてきた人々

第一朗読は『ゼファニヤ書』からですが、冒頭にこうあります。

主を求めよ。
主の裁きを行い、苦しみに耐えてきた
この地のすべての人々よ
恵みの業を求めよ、苦しみに耐えることを求めよ。
主の怒りの日にあるいは、身を守られるであろう。

「主の裁きを行い、苦しみに耐えてきたこの地のすべての人々よ」はフランシスコ会訳では「地のすべての謙虚な者たちよ」となっています。新改訳改訂第３版では「主の定めを行うこの国のすべてのへりくだる者よ」となっています。新共同訳で「苦しみに耐える」と訳されている「アナーヴ」は「圧迫され、貧しく苦しい」のほかに「謙虚にへりくだる」という意味でも使われます。フランシスコ会訳の注釈によれば、「アナーヴ」から、「アナヴィーム」という言葉がうまれたそうです。「アナヴィーム」とは単に貧しいだけではなくて、神の意志に完全に寄り頼む人々のことを指します。「貧しい人々」と「敬虔な人々」、「謙虚な人々」とは互いに関連するものだったようです。そして、救い主はこういった貧しく、敬虔で謙虚な人々に遣わされるという理解が生まれていきました。

人々

今日の福音朗読では「心の貧しい人々」「悲しむ人々」、「柔和な人々」と「人々」という表現が続きます。

いったい、この「人々」とは誰のことを指すのでしょうか。「10 節に「義のために迫害される人々」とありますから、迫害のただ中にあって苦しめられている人々のことを具体的に指すのでしょう。

ですから、イエスさまのお説教の背後にある事実は思想信条のおかげで批判され、いじめられ、苦しめられている人々がいたということです。

「貧しい人々」（3 節）、「柔和な人々」（5 節）はどちらも同じヘブライ語に由来するそうです。それは背を曲げるというもともとの意味がありました。背を曲げるほどに貧しい人々の意味であり、神さまの前で背を曲げて救いを乞い願う人々の意味でもあるのです。4 節の「悲しむ人たち」とは迫害やいじめの最中に死んでいった友人の死を悼む人々ではないでしょうか。5 節の「柔和な人たち」とは、迫害の中で苦しみながらもあきらめてしまうのではなく、しなやかに神さまに向かって背を曲げる人々ではないでしょうか。こころが折れずに、神さまを頼りとする人々です。そして神さまの義を待ち望む（6 節）人々は「幸い」なのです。

7-10 節では、同じ迫害の中にあっても積極的に生きる人々表しています。7 節の「憐れみ深い」とは迫害する人をゆるす人々です。8 節の「心の清い」とは迫害する人を憎まない人たちです。「平和を作る」（9 節）とは、迫害する人と和解する人々です。こういった人々は迫害にあっていても、「さいわい」なのです。憐れみを受け、神さまを見て、神の子と呼ばれ、そして「天の国」をいただくからです。

まとめ

イスラエルに行くと、ガリラヤ湖を見渡す丘の上に「山上の垂訓教会」があります。イエスさまがここから山上の説教をしたのだと信じられている場所です。

「幸いである」というメッセージは、ガリラヤの貧しい人々にとって、救いのメッセージだったことでしょう。彼らは神さまの救いからほど遠い人々と思われていましたし、自分たちも救いとは無関係だと考えていたからです。

「幸いである」のメッセージを、現代のわたしたちが耳にすると、少し戸惑いが生まれるかもしれません。そこで「こころの貧しい人々」とは一体誰のことなのか？と、この言葉をあれこれと考え始めます。それはそれで大切なことでしょうけど、むしろ、「こころの貧しい人々は幸い」というイエスさまのメッセージをそのまんま受け取ってみたらいかがでしょうか。そして、何度もこころの中でこの一節を繰り返してみたらよいかもしれません。

いつか、あっ、このメッセージは他でもない自分自身に向けられたものなのだ。ガリラヤ湖を見下ろす山上でイエスさまのメッセージを聞いているのは、わたしなのだという気づきが生まれてくるでしょう。教会は貧しい者のための教会なのです。神さまに頼らなければひとときも生きていけない、そんな弱さをよく知っている人のための教会なのです。

それではまた来週。